

読者へのメッセージ

示唆に富んでいる
現地貯留の考え

港北区役所 富樫 健

水を治める者が国を治める。古くからいわれたこのことが、近年都市河川を中心に大きな問題となっている。前号の本誌が「都市のなかの川」として河川の特集をくんだことは時宜を得たものと言える。

川を汚すな、水を大切にしろということは、すなわち自然を大切にということで教えを受けているが、都市に生活するにいたがってわれわれは川にたいし、また水にたいし関心を失いつつある。都市生活者にとって雨水は、もはや直接それを利用してだててを失い、できるだけ

早く川へ廃棄すべきものでしかなくなっている。そこで、最終的に川は水害のかたちをとり都市に災害をもたらしている。

都市河川の氾濫の原因は、いづまでもなく雨水の流出計数を増大させる乱開発にある。しかし、河川氾濫の原因となる開発反対を叫ぶ人々も、また原因者の一人であることに気付かないのが現状である。

そういうことから前号の『都市化と河川』のなかで「開発とそれにもなる河川改修の悪循環をたち切るため流域の水系システムを破壊しない現地貯留法」すなわち流出量保存の原則の提案は示唆に富んだものといえる。これは、建設省においても現在検討中のものではあるが、単に河川災害の防止という

だけでなく、根底に自然の回復と水資源の有効利用という本質的解決を有しているところに大きな意義を見いだすのである。

開発にとりまわす河川改修には、巨額の費用と用地買収、橋りょうの架換といろいろ問題が生ずるが、この状況の中で河川改修だけでなく、この際、住宅

・会社、規模の大小、既住者・新住者を問わず、開発者はすべて雨水の貯留を義務づけることと、同時に、その施設および貯留雨水の有効利用の方策を全員が考える時にあると思う。開発によるシワ寄せを流域住民のみが受けるということは、公平の原則に反することといわねばならない。

水のある川

下水道局 森田信英

かつては子供にとって絶好の遊び友達であった川は、水質が汚れそのうえ、河川改修により急勾配の護岸や鋼矢板護岸また河床の底張りの川にかわり、住民から身近な存在であったものから遠くへ押しやられてしまっている。

都市河川のあるべき姿は、洪水を安全確実に流下させ、常時清浄な水（維持水）が流れ、都市景観を増進するものであり、また、緑と空間を確保し、レクリエーション（魚釣り、水遊びなど）の場として、地域住民に開放できる河川であること（流

水と親水、両機能のバランスがとれた河川）である。（本誌前号二九ページ）

川は、都市におけるかけがいのない自然であり、市民に憩いとゆとりを与える水辺の空間である一面をとらえると、水害防止対策のための河川改修という発想から、水と緑とオープンスペースを持った都市公園造成のための河川改修と考えることも可能ではないだろうか。つまりこれは、河川改修の視点を河川の排水路機能の強化から、河川の親水機能の回復へと移行させることを意味する。

公共下水道が整備されると一面では、都市河川の維持用水は大幅に減小し、平常時の河川に水が流れなくなってしまう恐れがある。水辺の公園の水流を確保するため、上流開発地域で雨水貯留をしている防災調節池の維持用水源としての利用をはかる必要がある。また、浸透性地表面を大きくとること（浸透性アスファルトの使用等）により雨水還元をし、維持用水の確保をはかることも必要であろう。

現在進行中の六大事業の一つ

港北ニュータウン建設事業では、せせらぎのある街づくりを計画中とか聞いているが、三〇万人が居住する新しい街に親水機能豊かな川が存在し、子供にとっても良き遊び友達となる川であることを期待している。

「調査季報」は職員が自由に意見を發表し討論する研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。
この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。八〇〇字以内。

〈あとがき〉

「港湾都市横浜」に働く私たち職員も、港については意外に知らないことが多い。今回は都市と港のかかわりに重点をおきながら、横浜港の当面する問題をみてみた。客船から貨物へと港の比重が変るにつれて問題の現われ方はちがってくるが、横浜という都市に港が重要な意味をもつことに変りはない。今回十分追求しきれなかった問題も含めて、これからも「都市と港」を考えていきたい。（北小路）